

「縄文にときめく」ファッションで発信

～縄文土器の文様のドレスを制作～

千葉学園高等学校 生活文化科

令和2年12月13日(日)
はっち シアター1

泉山兄弟による是川遺跡発掘から100年。同遺跡は今、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録を目指しています。2021年夏にも実現する見通しで、縄文は世界の「JOMON」へと羽ばたこうとしています。

私たちは大好きなファッションで、八戸で発掘された縄文土器の文様の美しさや繊細さ、縄文人の美意識の高さを表現します。縄文の魅力をご覧ください。

「あでやかな注口土器」

鮮やかな赤色で光沢を放つ漆塗り。漆塗りのあでやかさに魅了されました。漆器は時代を超えて輝き続けています。縄文人にとって赤は特別な色。血、炎、太陽の色、生命の再生を象徴する色だったと考えられています。漆塗りの注口土器はハレの日の、とっておきの道具として使われていたのでしょう。世界に誇れる縄文の心と技を私たちが伝えます。



原資料:「注口土器」是川中居遺跡出土
重要文化財 高さ7.5cm 是川縄文館蔵



「凜とした深鉢形土器」

王冠のような突起の装飾。薄く丁寧に作られた深鉢形土器からは品格が伝わってきます。四角に区切られた縄文と磨り消された区画が交互に配列され、上下左右にどこまでも途切れることなくつながっている縁起の良い日本の伝統模様。遥か昔、約3,500年前の縄文土器に市松模様を発見しました。縄文時代から日本列島で愛されている「市松模様」を表現します。



原資料:「深鉢形土器」風張1
遺跡出土 重要文化財 高さ37cm 是川縄文館蔵



「優美な皿形土器」

豊かな感性と力強い造形美。皿形土器の裏面は、まるで葉や茎、蔓が伸びたり絡んだりした植物の唐草模様のように。自然のめぐみに感謝し再生を願う「心」の存在を感じます。丁寧に磨きあげられ、黒く焼かれた土器からは、縄文人の美的センスが感じられます。縄文の魅力を未来に伝えます。



原資料:「皿形土器」是川中居遺跡出土
重要文化財 長径25.5cm 是川縄文館蔵

モデル

「あでやかな注口土器」 栗村優海

「凜とした深鉢形土器」 佐々木優衣

「優美な皿形土器」 岩泉沙耶

制作

上野桃佳 大舘典佳 佐藤春奈 本村 楓 若松祐芽

協力 八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館

